

情報活用能力に関するNIEの実践と課題

河村 智美 (刈谷市立東刈谷小学校 教諭)

子安 潤 (愛知教育大学学校教育講座)

(2005年10月31日受理)

Practice and problem of NIE concerning information literacy

Tomomi KAWAMURA (Higashikariya elementary school of kariya-city)

Jun KOYASU (Department of School Education)

要約 本稿では、学校教育における情報活用能力に関する実践と課題について提起する。情報活用能力を培う手だてとしてNIEを主軸に、小学校5年生の実態にあわせて、地域を取り込み、情報を受信し、発信する実践を行った。そこでの成果と課題を述べる。

Keywords: NIE, 情報教育, 情報活用能力

1 はじめに

高度情報化社会である現在、私たちの生活には日々、情報があふれている。これからの社会を生き抜いていく人間は、情報の洪水に流されず、主体的に情報を取捨選択していくと共に、自らが「情報の主人公」として、情報を創造し、発信していく力を身に付けていくことが必要であると考え。

文科省は、小・中学校で、平成14年度から新しい学習指導要領に基づく教育課程の実施を打ち出し、その中に「情報教育の改善内容」が記されている。そこには、情報教育の目標としての①情報活用の実践力、②情報の科学的な理解、③情報社会に参画する態度の3つの「情報活用能力」が明示され、おもにコンピューターや情報通信ネットワークの活用を重視している。特に各教科、総合的な学習の時間におけるインターネットの積極的な活用が挙げられている。他方で「ネチケット」などインターネットなどの媒体を使用する際の注意点などを扱う学習も取り上げられているが、そこには、情報を多面的に見る力や批判的に読みとる力、また、さまざまな情報媒体の特質を理解し、活用する力など情報に積極的に関わり、自分の考えを深める学習への提言が不十分である。また、情報受信者としての自分と情報発信者としての自分を客観的に捉えることのできる力も必要であると考え。

佐藤洋一氏は、テレビを代表とするメディアについて、『「速報性・広範性・即時性(同時性)・臨場性」は文化の創造や世論の形成・事件の報道等の面で優れた機能を発揮するが、一方で子ども達が「メディア情報」を含めた様々な情報を理解・判断し、選択構成・発信する、いわゆる「思考・判断・発信の学力形成とそのスピード(学びの過程)」は急速には育たない』⁽¹⁾と

指摘する。現在のように、めまぐるしい情報過多の時代にこそ、子供たちの身近な地域を題材とし、新聞やインターネット等の様々な情報媒体を活用した実践が求められていると考える。

本稿では、NIEを情報教育の入り口にし、情報の科学的な理解を図り、地域の情報発信者との交流により情報活用の実践力を高め、最後に情報社会に参画する態度を育てる学習の展開を考え、実践したものを紹介する。

2 NIEとは

NIE(エヌ・アイ・イー)とは、News Paper In Educationの略称で、「新聞を生きた学習材として教育に活用するための教育界と新聞界の共同活動」を意味している。従来の学習で行われていた「新聞を補助教材として活用する」方法と大きくちがうところは、「①新聞を一面から最終面まで、記事や写真、広告まで丸ごと活用する。②複数の新聞を活用する。③教育界と新聞界が都道府県単位のNIE組織を結成し、共同で運動を推進するというところである。」⁽²⁾

アメリカでは、1930年代から大学生を中心に活動が取り組まれ、欧米では盛んに行われている国もあるが、日本では、1989年からNIE実践校で本格的に取り組まれるようになった。昨年度は402校が実践校となり、現在では、小・中・高等学校総数の1%にあたる学校が、実践校となるに至った。本年度、「日本NIE学会」も設立の運びとなっている。教室で新聞を使った学習が展開されることは、以前から当たり前のものだった。しかし、ここ数年、NIEと称し全国紙、地方紙問わず各新聞社が小・中・高等学校で行われているNIEの実践について紹介し、その活

動が広がりつつある。愛知県では、中日新聞社にNIEの事務局がおかれ、毎年、小・中・高等学校から10校前後NIE実践校が選ばれる。実践校となると、毎日・朝日・中日・読売・日経・産経新聞を決まった部数無料で提供され、学習に自由に活用することができる。

(1) NIEの学習

NIEの学習方法は、①新聞そのものを学ぶ活動と②新聞を教材として利用する学習に大別される。

「新聞そのものを学ぶ活動」としては、NIEの入門として、まず、新聞に親しみ、読む楽しさを知ることによって学習の導入とする意味をもっている。具体的な学習の内容としては、①一面や社会面、経済面などの新聞の構成を知ること。②新聞の版の違いや、地域版による違い、複数誌の新聞の違いなどを知る。③新聞記事の内容（大見出し・小見出し・リードなど）を読み解き、5W1Hによる記事の書き方、分かりやすい情報の伝え方などを知る。さらに、④新聞記事が新聞として印刷されるまでの工程、記事を作り、発行されるまでの記者の仕事やレイアウト、配達などの新聞に関わる人々にふれあう等の学習活動がある。

また、「新聞を教材として利用する学習」には、テーマを設定しての新聞切り抜き活動や新聞を用いたスピーチ、または、記事を各教科の学習にリンクさせ活用する等の学習活動がある。

後述する実践の前年度に、新聞そのものに主眼をおいたNIE学習を展開した。地元広域紙の協力を受け、同一日の全地方版（36紙）をいただいて新聞の読み比べをしたり、新聞社へ見学に行き新聞づくりの話や新聞の読み比べ、情報の速報性について話し合いを行ったり、全国で発売されている新聞、業界紙、外国の新聞などを集めて、独自性・地域性について意見を出し合ったりした。新聞を使った学習を展開し、テーマ設定をした新聞切り抜き活動やスピーチを継続する中で、子供たちから多くの情報が教室にもたらされ、それを教材として各教科や総合的な学習の時間に活用することができた。

(2) NIEの実践

本年度、NIE全国大会も10回を迎え、実践の報告も数多く出されるようになった。全国紙を中心に各新聞社でもNIEの実践に活用できるようなワークシートが無料で提供され、実践事例集的な出版物も増えてきた。小学校では、総合的な学習の時間の定着により、実践がしやすくなっているといわれる。

しかし、小学校における多くの実践事例を見ると、スクラップや記事を読む活動は、定期的に行われているものも多いが、実践事例やワークシートとして提供されているもの多くは、学習が一つ一つピクニック的にまとめられ、完結しているものが多く、先に挙げたような各学習内容を系統的に位置づけ、学習を継続し

て深めていくような活動として紹介されているものは、少ない。また、新聞を活用する（切り抜き、記事を読む）学習に終始し、そこから発展して学習を展開する活動にまで広がっているものは非常に少ない。

さらに、「新聞づくり」や「ホームページづくり」など発信に主眼をおいた学習内容になると、情報を読み解く力（情報リテラシー）の学習が不十分になることが多いように思われる。そこで、以下に述べる実践では、これまでの先行研究を踏まえ、NIEの実践をさらに広げ活動することに主眼を置き、子どもたちからの自発的な学習を促し、学習を展開することをねらった。

3 5年生社会科の実践

本学級の子供たちは、昨年度より新聞を使った学習をしており、テーマ別の新聞の切り抜きや新聞を使ったポスターセッションなどは昨年度経験している。今年度も4月より、新聞のテーマ別切り抜き活動や新聞を使ったスピーチなどを継続的に行っている。しかし、これまでの学習のなかで、情報の働きや意味を深く考えたり、実際に情報産業に従事している人と接点をもったりすることはあまりなかった。

情報は、私たちの生活に深く関わり、さまざまな影響を与えている。しかし、その存在は特別に意識しない限り、容易に見逃してしまう。目に見えない存在を、いかに意識させるかが重要となってくる。そのため、子供たちが意識しやすい地域の情報を取り上げ、情報を発信する人との継続的な接点をもつことで、情報を発信する側の工夫や努力を知らせたい。そして、自分たちも情報を発信する活動に挑戦していくなかで、地域の良さを見つけ、情報を創造し、発信していく力を育てたいと考え、自分たちの生活との関わりを具体的にイメージしながら、情報を取り入れ、発信しようとする子の育成を研究の主題として設定した。

(1) 研究の目標

本研究の目標は、子供に生きる力を身につけさせることである。そこで、生きる力を、①身の回りにある多様な情報から、必要とする価値ある情報を見分けて、収集する力、②自ら他者に働きかけ、取り入れた情報について自分なりの問題や考えをもって発信しようとする力とらえた。

(2) 研究の仮説

生きる力を育成するために、次のような仮説を立てた。①子供たちが、様々な情報の中で生活しその特性を生かしていることを意識させることで、必要な情報を主体的に収集・分析・処理・創造し情報活用の実践力がより具体的に養われるだろう。②地域の情報にふれ、身近な情報を発信する人との出会いや活動を行うことで自分たちと情報との関わりを感じ、情報モラル

の必要性や情報に対する責任について考え、情報社会に主体的に関わる態度を養うことができるであろうと考えた。

(3) 研究の手だて

仮説を検証するために、3つの手だてを講じた。

①単元構想の工夫…子供たちが、様々な情報の中で生活していることを実感し、情報についての考えを深めることや、地域へ取材に行き、情報を発信する意欲を持続するために、社会科だけでなく、総合的な学習の時間や国語などを合科的に配しながら、指導計画を立て、学習活動の時間を保証していく。②情報を発信する人の思いに近づく場の設定…身近な地域の情報を発信している人から、その思いや願い、工夫や努力を知ること、情報を受ける側として、情報をどのように見分け、選ぶとよいかを考えさせたい。そのために週刊の「刈谷ホームニュース」の記者と継続的な関わりをもったり、ケーブルテレビを見学したりする。これにより、子供たちは、情報を受ける側としての考えを深めながら、情報を発信することへの興味関心を高めることができるであろうと考えた。③情報化社会シンポジウム開催…情報を受信する側、発信する側双方の経験をしかして、これからの情報化社会はどうあるべきか、自分たちはどのようにしてこの情報化社会で生活していくとよいかを学習のまとめとして行う。これまでの学習で考えたことを自由に発表しあうことで、情報に対する具体的なイメージをふくらませ、自分の考えを深めることができるであろうと考えた。

(4) 研究の抽出見

本研究では、抽出見「Y子」を定めて仮説を検証していくことにした。

Y子は、1学期のはじめにはなかなか学級の仲間とうちとけられなかった子である。まわりのことをよく見て、自分の考えを文章でまとめることは好きである。しかし、友達と協力して活動する時には、自分に自信が持たず、積極的に活動することは少ない。

本単元を通して、たくさんの人や友達と関わりながら自分の考えを深め、情報発信の活動を通して自分の考えを表出することの喜びを感じ取れるようにすることをねらいたい。

4 研究の実際

(1) 松井選手よりサルが大事！

～自分たちに必要な情報を求めて～

本学級の子供たちは、昨年度からの新聞の学習で新聞については情報として意識し、その良さや問題点について意見の言える子が多い。しかし、その他の情報媒体については、あまり意識されていないように思われる。そこで、学習のはじめに「情報を発信しているものにはどんなものがあるか」自由に出し合うことにした。子供たちが出したものを黒板に受信者別に整理

して板書することで子供たちからできるだけたくさんの情報発信手段を出させるようにした。子供たちは、意見を出し合うなかで看板やFAX、回覧板なども情報を伝える手段だと分かり「たくさんありすぎて分からない」や「こうやってあげていると毎日、情報がいっぱい送られているんだ」とつぶやく子もいた。情報手段をあげていくと、私たちの生活では、テレビやインターネット、新聞のように、たくさんの人に向けて発信されているものと、学校のお便りや回覧板など必要な人だけにおくられているものがあることに気づいた。そして、子供たちが考えやすい「テレビ」「新聞」「インターネット」についてそれぞれの利点や問題点を出し合うことにした。

3つの媒体について、班ごとにそれぞれの利点と問題点をまとめさせ、学級で発表することにした。Y子の班は「テレビの問題点」であった。Y子の班には、活発なA子がいる。A子がどんどん意見を言うので、Y子はA子の意見を画用紙にまとめ始めた。発表もA子が仕切っていたので、Y子はA子に任せ、自分はメモをとる方にまわった。しかし、A子が楽しんでまとめている様子を見ながら、自分の考えを授業後に画用紙を持って来ては教えてくれるようになった。グループ発表は、それぞれ知恵を出し合い、各班の発表のあと、全体で話し合いをもちながらまとめた。子供たちのなかでは新聞については、今までのNIE学習からくわしく知っているが、テレビのニュース番組を見て考えたり、インターネットでニュースを見たりという経験が少ないこともあり、テレビのグループでは、テレビのニュースを見て考える学習カードを作ってきた子がいて、ニュースについて全員で意見を出し合う授業を設けた。子供の知的な欲求を学習で生かすなかで、子供の意欲の高まりを感じることができた。

Y子の感想にもあるが、3つの媒体を比べるなかで、子供たちが地域の情報にこだわりをみせ、考える子が出てきた。

そのころ S子が「昨日お兄ちゃんが見た交通事故の記事が今日の新聞に載っていた」と話をした。そこで、朝の時間を使って「どうして昨日の事故が記事になったのか」自由に話をさせることにした。すると「警察署に記者が待っている」「いつも、病院に記者が待っている」「だれかが新聞社に電話する」などの意見が出た。しかし、多くの疑問が残った。そこで、これを解決するために、記者をよんで話を聞くことにした。

子供たちの目が地域に向き始めていることもあったので、刈谷ホームニュースの記者に來校してもらい話を聞くことにした。刈谷ホームニュースは、刈谷市内の個別配達の新新聞に折り込みとして毎週金曜日に配達されるものである。地域の情報が満載で、子供会の情報などの子供たちでも読んでいくと分かる記事が多く載せられている。ここでは、地域の情報を伝える記者

の「思い」やどうして刈谷の記事を紹介するのかを中心に話をしてもらうことにした。

ホームニュースの記者が開口一番、子供たちに聞いたことは「この辺で野生のサルが出たという話を聞いたけど、君たち見てない？」だった。ちょうど、日記に書いた子が、「見た」と話をするとすかさずメモを取り出し、聞き始めた。その様子を見ていた子供たちからは、驚きと同時に熱意が伝わったようだった。そして、どうして自分が記者になることにしたか、どうやって地域の記事を集めるのか、地域の人に記事を紹介することの喜びなどを熱心に語った。なかでも「私にとっては松井が何本ホームランを打ったかも大事だけど、それより、野生のサルのことの方が大事!」というのが子供の印象に残ったようだった。Y子の感想にも記者の熱意と思いが強く書かれている。

時期を同じくして、新聞だけでなく他の媒体にもふれるため、ケーブルテレビの見学に行った。Y子は「たくさんの人に見てもらうための工夫」と「どうやって情報を集めているのか」を質問することにした。ケーブルテレビの見学でも「地域の人に喜んでもらえる情報を伝えたい」「町の人と接するなかでいい情報が得られる」といった話を聞き、先の記者の言葉と重なることが多く思いを深めるのに効果的だった。さらに、ケーブルテレビからの取材を受けることも決まり、自分たちの話題、地域の情報は身の回りのすぐ近くにあることを実感できた。

見学のあと、これまでの学習をまとめ、次にどんな学習をしたいかを話し合ったところ、新聞を作りたい、インターネットも調べてみたいなど多くの子供たちが情報を伝えることに思いを寄せ、地域へ出かけて取材をしたいと意欲を見せた。子供たちの思いや願いを逐次、学習プリントや座席表でおいながら話し合いをもつことによって、たくさんの子供が自分から取材へ出かけたいと意志を示した。「これからの情報について話し合いたい」や「インターネットでニュースを見たい」などの意見も取り上げ、単元構成をかえていくことにした。

(2) 小垣江の秘密を探せ

～地域へ出かけての情報収集～

子供たちは、話し合いの結果、学区のことを取材して新聞を作ることにした。特に新聞にこだわったわけではないが、記者の話のなかで、具体的な記事の書き方や写真の取り方を教わっていたので、子供たちは新聞で書くことに意欲をみせた。記事の書き方は、国語の時間や新聞学習でその方法を学ぶようにした。

しかし、学区のことを記事にするといっても意外に知らないことが多い。子供たちに記事にできそうなものを挙げさせたが少なく、不確かなものが多い。そこで、ケーブルテレビが制作して学校に配布した「歴史の小径」を全員に視聴させ、学区にどんな秘密がある

か調べさせた。子供にとっては、その存在を知っていても、意識されていないものも多い。子供たちが「取材に行きたい」という思いを実現させるために、学区について自由に話をするフリートークの時間を設けた。これによって取材テーマを広げることができたと思われる。

Y子は熱心にビデオを見て、去年聞いた小垣江駅の瓦の話思い出し、話をしてくれた。そして「小垣江駅の歴史」や「前川の橋について」取材したいとカードに記入した。

子供たちが書いたテーマで新聞づくりのグループを作った。子供たちに「何人で新聞を作りたいか」と聞いたところ「ホームニュースの人が4人だったから、自分たちも4人くらいで新聞を作りたい」と4人グループにまとまった。ホームニュースと同じように4人それぞれに役割分担をし、新聞用紙も掲示用B全判、印刷用B4版、タブロイド紙用A3版の3種類用意し、子供たちが誰に向けて発信し、そのために最適な形式はどれかということを考えさせながら、取材活動を始めることにした。

Y子は、記者をやることになった。そして、小垣江駅の話をし、K男に取材へ行くことを勧めた。自分は今までに調べていない「小垣江の橋の欄干パネル」について同じグループのA子と取材に行くことにした。取材といっても誰に聞いたらよいか分からず、A子と二人で相談して市民センターに聞きに行くことと分かるかも知れないと早速足を運んだ。

初めの取材では何の収穫もなく、落ち込んでいたが、A子とお互いに励まし合いながらもう一度取材へ行ってみることを決めていた。Y子は、A子の影響もあり、ずいぶん粘り強く、また、積極性が増してきた。放課

私たちは、地域の新聞を作るために橋について調べ始めました。まず、市民センターに行けばわかるだろうと思いきや、市民センターの人は知らなくて、どうしようと思っていたら、市民センターにいたおばさんが、「Hさんがよく知っている」というので、だれかも知らないHさんに聞いてみようと思いましたが、私はこの時、聞き込みがなければ、分からなかったことが分かって、情報の輪ってすごいなあと思いました。

取材に行ったY子の感想

の時間になると近くへやって来て、駅の取材はうまくいったこと、とりあえず写真を撮りに行っていい写真が撮れたこと、もう一度取材へ行くことなど熱心に話すようになった。「取材がやってみたい」と口にする

Y子の表情が以前とずいぶん変わったと感じられた。

そして、こつこつと取材を続けたことにより、自分たちで学区の歴史をよく知る人に行き当たることができた。この初めての経験にY子はとても興奮し、自分の取材に大きな満足感を得ることができた。また、聞き込みから取材に行くまでの様子を自発的に日記にまとめた。

市民センターでものしりおじいさんがいると聞いて早速取材に行くことにしました。でも、もっと早い時間でないと取材できないといわれて、後日取材に行きました。Hさんという人で何と90歳！昔の前川の橋を造ったこともあって、小垣江のことをよく知っていました。それに、自転車で橋まで行ってきて、くわしく話してくれました。

取材に行ったY子の日記

各グループの取材活動は、それぞれ個々の動きが明確になるように3日分の予定表を編集会議で作成し、自分の分担を確認できるようにした。取材に行き詰まった時は、学区の人を紹介したり、資料を提供したりした。また、子供たちの取材は、放課後の時間に行わせたが、できるだけいっしょに行けるように時間を合わせ、教師も共に活動した。学区の方もとても親切で、子供たちは「駅長さんは、資料をくれたりしてびっくりした」や「取材へ行って楽しかった」という感想ももっていた。

しかし、川にいるマスカラットやヌートリアという動物の撮影を試みたグループは結局スクープ写真を撮ることができず焦っていた。このような、思うように取材ができなかったグループには、近くの「人」にとかく話を聞くよう助言した。すると「川に大きな動物がいるのを見たが夏だった」「ここに巣がある」などの関連したネタを学区の人から取り入れることができた。ホームニュースやケーブルテレビの記者の「ネタを足で探す」という言葉が非常に印象的で、子供たちの取材の合い言葉として定着し、自分のグループ専用のデジカメを片手に取材へ行くという、ダイナミックな活動へとつながった。

これらのグループごとの活動は学級通信や朝の会などで子供たちに紹介し、互いの活動を認め、継続できるよう支援した。取材活動をしていく中で、どの子供たちも明るさや積極性が出てきた。これは、「書く」という表現活動だけで養うことは難しいと実感した。人との出会いが子供たちの変化を促し、新たな出会いが子供たちを育てていくことを改めて感じる事ができた。また、学区の人がとても親切でどこへ行っても

温かく迎えて下さったことも子供たちの取材活動を続かせた。1か所、1回の取材にとどまらず、数カ所を2度、3度と取材へ行く。また、自分たちから気軽に声をかけ、話を聞いて来られるのも学区のもつ良さであると子供たちも実感できたことが大きな収穫であった。

(3) わが町小垣江を発信

～地域の情報を発信しよう～

充実した取材活動を経て、いよいよ発信することにした。取材前に子供たちに確認していた新聞3種類のうち、どれなら受信者により読んでもらえるかを考えて、再度検討し、新聞づくりに取りかかることにした。

私は、新聞の取材に行って予想外の所で、発見できました。地域の人の聞き込みで取材できたし、情報ってすごいなあ……と思いました。班の子が最初やる気がなさそうだったのに、自分たちで小垣江駅に取材に行ってからとても楽しそうになった子がいます。

私もがんばっていい新聞を作らなきゃって思いました。

取材後のY子の感想

Y子は、模造紙大の壁新聞を作り、自分のように学区を知らない学校の人々に知らせたいと考えた。しかし、同じグループのK男やR男は学区の人に配るのに印刷用の新聞がいいと言って意見が分かれた。Y子はこの学習してから、友達の話聞きながらも自己主張もし、考えようとする事が多くなった。Y子にとっては自分がこだわった写真が、カラーで大きく貼ることのできる壁新聞の方が魅力的であり、市民センターに貼りたいということを目指した。そこで、模造紙大の新聞と印刷新聞は段組や字数が同じものが用意しており、うつつだけで書き換えられるので、先に模造紙大の新聞を書いてはどうかと助言した。これにより、模造紙大の新聞づくりがスタートした。

各グループとも新聞づくりはスムーズに進み、印刷新聞では原稿を分割し、おおよそ1時間で新聞を作りあげることができた。昨年からの新聞づくりの学習が随所に生かされ、見出しや小見出しなどを工夫し、お互いに原稿を読みあって校正をしながらテキパキと製作することができた。

Y子のグループは、取材活動を広げていき「橋の欄干パネル」「小垣江駅の瓦」「小垣江の名前の由来」「半崎の常夜灯のナゾ」などさまざまなネタを仕入れてきた。そこで、どれだけレイアウトを考えても1枚におさめることができず、2枚の新聞にまとめることにした。Y子は特に、この取材活動で出会った人についてくわしく記事に残したいと、駅長さんやHさんな

ど人にこだわった記事づくりを工夫した。そして、新聞の感想に次のように書いている。

この新聞を作って、小垣江にはとてもいい人がたくさんいると分かりました。

Hさんはていねいにいろいろ教えてくれました。

Y子の編集後記

子供たちの新聞の編集後記を見ると、多くの子が「小垣江にこんな所があるなんて知らなかった」「○○さんというすごい人がいて、びっくりした」など、自分が肌で感じ、思ったことを率直に文章に表現することができた。体験を通して子供たちが得たものは、文章に表現をして改めて具体化され、それぞれちがう取材であっても同じような思いが感じられたことを、お互いに理解できた。書くことが苦手な子も、自分の負担を期日までにこなし、新聞を書きながらも再び取材へ出かけ、写真を撮ったり、第2部を作ったりと2学期の終業式まで子供たちの新聞作りは続いた。Y子のグループも2枚目の製作におわれ、休み時間になると新聞を作っている学習室へ急いで移動していた。やる度に新しいアイデアがうかんで、おもしろくてたまらないというY子の姿があり、いつも学習室で新聞の見所を解説してくれた。書かれた新聞は、クラス全員と他学年にも見てもらうために学年の廊下に掲示した。子供たちがあらかじめ決めていた受信者へ発行する前に、自分たちの作品をお互いに見合い、その良さを確認することができた。また、再びホームニュースの記者に來校してもらい、できあがった新聞を見ていただき、直接子供たちに感想を話してもらうこともできた。

(4) これからの情報化社会は…

～情報化社会シンポジウムを開こう～

情報を受けるといふ活動と発信するといふ活動を体験した子供たちは最後に、これからの情報化社会を考える学習を行った。これは、情報発信の学習をする前に、これからどんな学習をしたいかというアンケートでも出されたもので、今までの学習をふまえ、「空論ではなく実現的な学習のまとめとして行いたい」と思い、そのためには、これまでの活動の中でふれてきた「人」に焦点を当て、情報は人が作り、発信するものであるといふ具体的なイメージを大切に、考えさせていきたいと考えた。

そこで、始めに、前時までの学習したことを生かして自分の考えをカードに記入させた。見出しなど簡潔にまとめる学習をしてきたことをふまえて、「情報を発信するために大切なこと」と「情報を受けるために大切なこと」をそれぞれキーワードでまとめさせ、その理由を書かせた。Y子は「人との輪」が大切である

と記入した。新聞やテレビの仕事にたずさわる人の話を聞き、自分で取材へ行って考えたことをまとめることができた。さらに、欄外にHさんと出会ったことの喜びを再度記入し「情報ってすごいなあ…」という言葉でしめくくった。子供たちの意見を交流させるため

テレビやインターネットはこれから情報が増え、どんどん増えていくと思います。そんな中、新聞は消えていってしまうかも知れません。だけど、地域のことをいちばんくわしく正確に伝えているのは新聞です。

私は、班で地域のことを取材に行った時、地域の人の聞き込みでぜんぜん知らなかったHさんという人に取材できました。それに、地域といっても、私のぜんぜん知らないことがほとんどで、とても調べていて楽しくなりました。そんな地域のことがとてもたくさん書いてある新聞はすごいし、大事だと思います。世界的な大きなことを取り上げている、テレビやインターネットも大事だとは思いますが、地域のとって小さなことをみんなに伝えている新聞をちゃんと考えるようにしたいです

Y子の発表用原稿

に、今回は、シンポジウム形式で行うことにした。子供たちの多様な思いを出させるために、いくつかの考え方を例示し、そこからふくらませて他の子の意見を出させていきたいと考えたからである。シンポジストは6人の子供とホームニュースの記者で、始めに6人の主張を聞いてから、意見交流をすることにした。この学習を経て自信をもち始めているY子には、シンポジストとして発表者にまわらせた。シンポジストには、それぞれ簡単な原稿を用意させた。全員の意見は座席表におこし、教師側が把握しておいて、意見が絡み合うように準備をした。

Y子は、最初の発表者であったが、堂々と意見を言うことができた。原稿をほとんど見ずに、自分の思いを友達に分かりやすく伝えることができた。Y子の発言から、他の5人の子たちも、原稿に頼らず、自分の言葉や資料を使って自分の考えを発表することができた。

議論の中心になったのは、「インターネットの利用が増えるけれども、危険なHPにどのように対処していけばいいか」「テレビやインターネットの普及で人の顔が見えにくくなっていくような気がするがどうするのいいか」の2点であった。人の発表を聞いて、他の子供たちからY子の「地域の情報・広がる輪」に賛同する意見が多数出された。子供たちもそれぞれ取材

活動で得てきた感動をみんなの前で表現することができた。

学習のまとめとして、これからの情報化社会を「漢字一文字」で表すようにした。本単元の学習への思いやイメージをこの一文字に込めさせたいと考えたからである。全員の子供たちが思い思いの字で表現し、その字に込められた思いをプリントに記入した。同じ字を書いても、それぞれ別の意味を表現した子もいた。ホームニュースの記者は「難」という字で表現した。「輪」という字を書いたY子は、友達の意見を聞いて下のようなまとめを書いた。自分たちが主体となって情報を受けたり、発信したりしてきたことで、情報が目に見える存在となり、自分たちの手で情報を発信することに喜びと自信をもつことができたと感じられる。

これからの情報化社会を 漢字一文字で表そう

安(安心), 必, 人, 情,
変, 新, 電, 正, 整,
取, 楽, 増, 危, 進,
平, 広, 信, 輪, 多, 確など

漢字一文字抜粋

たくさんのことをみんな考えていて、私が思ったことはMちゃんとK君の言っていることと、とても近いと思いました。安心と危険な部分…今もあるけど情報をもっと多くなる未来はもっと多くなると思います。でもやっぱり機械にだけまかせる情報というのは、ぜったいにイヤだ！と思い、みんなが安心できる情報がいいと思います。

これからも情報が広がり、世界にもっと大きな情報の輪ができると思います。

Y子の授業後の感想

(5) 研究の考察

① 仮説1について

自分たちの周りには、あふれるほどの情報があり、いつもたくさん情報に晒され、生活している。子供たちは、本単元を通して情報の量的な多さや、質的な多様性を発見し、自分たちがその情報の中でどのように生活していくべきかを考えることができた。目に見えていなかった情報が、「地域」を焦点を当てること

情報ってすごいなあ…と思いました。私たちのまわりにはたくさんあったなんて、気にしないと分らなかったと思いました。

キャッチへ取材へ行った時、げんこうを上手く読めなくて、アナウンサーはすごいと思ったし、取材に行ったとき、おばさんたちやいろんな人に話を聞いて、物知りおじいさんに出会えたー！情報ってすごいな…

Y子の学習プリントから

でイメージがしやすくなり、自分たちが発信する活動から、より具体性を帯びることができたと思われる。

また、情報に広く目を向け、見分け、考えるために、年間を通した新聞学習や総合的な学習の時間を使ってさまざまな情報媒体にふれさせるための学習は、子供たちの意欲をかきたてた。数種類の新聞を使った記事を見分ける学習や、数字で情報を見る学習など子供の興味関心を把握しながら、様々な方法でアプローチしたことが学習意欲の継続にもつながったと思われる。Y子は、毎日の新聞スピーチを行う時も、同じテーマを扱った2種類の記事を用意してクイズをおりまぜながら自分自身も楽しんでスピーチをすることができた。日常にあふれる情報を学習することが、日常の活動に反映されてくる姿がそこに見られた。

さらに、具体的なイメージが広がった学習の最後にシンポジウムを開き、漢字一文字で自分の考えを表現するという活動も子供たちは意欲的に取り組んだ。限られた(漢字一文字)条件のなかで、いかにして自分の考えをまとめ、表現するか。情報発信の一つとして自分のイメージを具現化させる方法として効果的であったと思われる。

② 仮説2について

学習の早い時期にホームニュースの記者との出会いやケーブルテレビへの見学に行ったことで、子供たちの目が、身近な地域に自然に向き、地域からの情報発信への活動につながった。情報産業では、その発信者が実際に表に出ることが少なく、子供たちにはイメージしにくい。しかし、本単元で人を通して、新聞記事を見たり、番組を見たりという見方ができるようになった。また、作る人の思いを生で聞くという体験は、子供たちの心を打ち、活動への原動力となった。ホームニュースの記者には、何度も来校してもらい、子供たちと話をしてもらった。「地域のニュースを伝えたい」という一貫したテーマをもって熱く語る記者に子供たちは魅せられていた。

Y子は、この学習中に4種類の新聞づくりに挑戦した。記者に会うたびに、新しい新聞づくりを始め、発行していくY子は、友達の輪も広がり、表情も明るく、

自分への自信も持てるようになったようだ。Y子の保護者から、「Yは、最近、とてもおもしろい文章を書くようになって、びっくりしています。私も楽しんでます」というお話を伺った。また、単元の学習中に、ホームニュース、中日新聞社、ケーブルテレビなどが学級の取材に訪れ、取材の様子を見て、受ける側と発信する側双方を実体験できた。「現場」が見えるということも、子供たちの意欲を刺激する一助となった。

さらに、地域の情報を取材するにあたって、たくさんの人と関わったことが子供たちにとって大きな財産になった。今まであまり知らなかった学区を「おもしろい」「すごい」と楽しみながら歩き、積極的に人と関わられるようになった。Y子のように「地域」や「人」にこだわり考えを深める子が多く、その表現方法も多様であったので、シンポジウムでの活発な意見交換につながった。

(6) 研究の成果と今後の課題

取材活動やシンポジウムでの話し合い、新聞づくりなどは、クラスの団結力を高めた。情報に出会うことは、人に出会うこと。常に新しい人ではなく、時には身近な仲間の一面を知ること出合いであると考え。本単元のあと、子供たちの授業での発言が多くなった。どの子も表情が明るく、自分の思いを素直に表現しているように感じられる。Y子は、情報の学習が始まってから、自分のことをよく話してくれるようになった。そして、前向きに活動している姿が多く見られ、うれしかった。

今後の課題としては、これから急速に増えるであろう、インターネットやパソコンを使った情報発信を視野に入れて、単元構成を考えていきたい。今や、ニューメディアによって、遠隔地の学校や外国とも同時発信ができ、情報収集能力も飛躍的に増大している。地域から情報を受けたり、発信したりすることを学びながら、その学習が、世界へ広がり、これからの国際社会を生き抜いていく力を養えるようにしていきたい。

5 おわりに

本実践は、N I Eを発展させ、N I Eで培った理論を土台に、情報活用の実践力を高め、情報社会を考える態度を養うには効果的であったのではないかと考える。小学校では、コンピューターの活用にはじまると活用の仕方を学習することが中心になったり、インターネットで情報を一方的に入手することに終始しがちになったりする。その点、N I Eは様々な切り口からスタートでき、情報を入手し、それを発信する活動にすることは、コンピューターの入力を学ぶより容易である。また、新聞づくりは、従来から学習のまとめ、発信方法として小学校では定着しており、それをさらに発展させることも可能である。

問題点としては、N I E活動が「今までの新聞を活用した学習とはちがう」と敬遠され、取り組みが広がっていかないことにある。実践事例集や各新聞社のN I E報告を見ても、一部の熱心な教員により実践がなされていく実践の裾野がなかなか広がっていかない。

また、教員自身が氾濫する情報を主体的に受信・発信する力、メディアを批判的に主体的に読み解く力を十分に養うことも必要であると考えている。

(以上 河村)

一般に、メディア・リテラシーの教育という枠組みにおいては、メディアを読み解くことに主眼をおいた実践と、自分たちが情報を発信することに力点をおいた実践があると理解されている。N I Eの実践は、どちらかと言えば、メディアを読み解く側に力点をおいて実践されてきた。新聞の作成過程を学ぶことや読み解いた中身を表現する実践も展開されているが、新聞というメディアを利用した表現という枠組みで展開されることが多かった。その枠組みのメリットは依然として存在し続けているが、これをさらに拡張する方向が河村実践には含まれている。

河村の実践構想は、新聞の利用や新聞の作成というN I Eのこれまでの手法や枠組みを内に取り込みながら、それを越えて、地域に軸足を置きつつ情報の収集から発信までを子どもたちに学ばせるものである。そうした経験を通じて、メディアの特質の違いを意識化させようとしている点に最大の特質がある。

それは、既にできあがっている新聞記事の読み解きを越えて、情報の収集からその加工・発信というプロセスを新聞に限定せずに自分たちで行うという意味で、従来の枠組みを超える地平を開いている。特に、今回、地域のケーブルテレビというメディアを学習の対象として取り入れ、さらにインターネットなど新聞以外の媒体の特質との比較を体験的に行うことで学習の幅を広げている。それぞれのメディアには特質があるが、それらを利用する場合にもそれぞれに応じたリテラシーが求められる。また、他のメディアとの違いを知ることによって、逆に、個々のメディアの特質も認識されていく。メディアミックスが進む中で、特定の媒体に拘束されて学習過程を構想するのではなく、それを広げる方向で学習過程を構想した点で重要な提起となっていると言えよう。

(以上 子安)

〈参考文献〉

- (1) 佐藤洋一編著 『メディア・リテラシー教育』 明治図書 2002年 p14,15
- (2) 妹尾彰 吉田伸弥 岸尾祐二著 『総合的な学習で新聞名人』 東洋館出版社 2000年 p2,3